

# 昭和十年代の堀辰雄

——「沈黙的抵抗」の周辺をめぐって——

杉野要吉

戦後、戦争下の知識人の思想に対する批判的検討が、戦争責任の問題にからみ活潑な議論をよんだが、つねに未解決のまま残されてきたこの困難な問題をめぐり、ここ数年、やや戦後批判の反批判傾向をふくみつつ、よりいちだんと深化した調査研究がすすめられつつあるようである。なかでも、思想の科学研究会編『転向』三巻の完成は、観点を一新した、戦中思想調査の貴重な成果であったといえ、ほぼこの共同研究の周辺、延長上に、資料的にもかなり踏み込むにいたった、こんにちにおよぶ戦中思想探索、調査の展開があったといえるとおもう。これを文学の問題にかぎっていえば、とくに岩波『文学』でとりあげた「戦争下の文学・芸術」特集（昭36・5）昭37・4）およびそれにつらなる以後の連関論文などの線上において、戦争下文学研究における一つの土台がおかれたことは疑われない。

知られるように、日本の戦争下に、フランスのような実行をともなつた、積極的な抵抗など存在しなかった。積極的、行動的抵抗をこそ抵抗と呼ぶに価するならば、日本の現実にはそれはなかつた。この点は現実のこととして、まずはっきり確認せねばならぬ

とおもう。しかし大熊信行が発言するように、

わたしは戦争期の思想に主戦と反戦の対立があったとする見かたを、あまり重視しない。(中略)書かれるべき思想史としては、戦争支持者のあいだにおける思想上の対立にこそ、興味の焦点がおかれるべきものだと考える。(大日本言論報国会の異常性格)『文学』昭38・8)

この観点に立って、たといそれが微力であり、政治的に実質無力にしか働かなかつたとしても、その時代下に伏在した「非戦・反戦の思想」を激動した歴史のなかに単純に埋没せしめてよいだろうか。時代の荒波にあえなくかき消された無にひとしいそのひとつ、ひとつのあわつぶを、歴史研究というひとつの追体験の眼鏡を通じて、こんにちに発掘し、実質をその時代史に復活させることは、やはり必要だと考える。

いったい、戦争下の文学においても、いわゆる「沈黙的抵抗派」とよばれる文学者たちの戦争下の芸術的抵抗のありようについて、協力的、ないし転向作家を含む協力的偽装派の文学者についてその戦争下の姿勢がかなり精密な探索をみている現状に比

し、断片的な論及をのぞくほか、それをまともからとりあげ、検証した形跡はなほだとほしい。これは、大熊の観点もさることながら、いちめん、この派の戦争下の姿勢が対外的な発言や行動にとほしい沈黙的なままで貫かれているために、抵抗的側面への検証のふみこみが、簡単にはゆかないことにも連関していたのである。しかも現状においても、この派の沈黙的ありようが実質戦争下にもった歴史的意味の分析となると、資料もとほしく、それを客観化してとらえる時間的な距離が充分ととのっているとはいえない。しかし、戦争に対し無力にひとしかつた日本の戦争下の文学のなかにあつて、けつかつとして、文学の良心と純潔を、もつともよく保持し貫きえたのが、この派の文学者であつたことがたしかだとすれば、協力的、ないし協力的偽装の派に対すると同様、この派の周辺を、もつと解明する努力を、かなり要請されている点があるとおもう。本稿では、以下、ほんの表層の一側面にすぎないが、この問題を堀辰雄の文学のばあいにとらえ、その現状の二、三の点を整理しておきたいとおもうのである。

この派の文学者のばあい、正面切つた時局への直接的発言がほとんどえられぬ以上、同時代周辺文学者の姿態をとらえ、それとの対応のなかに沈黙的姿勢のもつた意味をみてゆくことは、ひとつの大切な視点である。足がかりとして、まず、堀とは典型的に対照的な道をすすんだ火野葦平の文学の論が、最近どこに観点をすえ把えられているかをみておきたい。

この点で、安田武が『文学』に発表した火野を中心とする戦争

文学論は、再現困難な戦争下にするどく切りこんだ、近来のすぐれた十年代文学の論であつたとおもう。安田はそこで、火野の文学のなかに侵略戦争に加担した文化戦犯としての「罪」をしかみない、「民主的」批評家グループの「思想」的不毛をつくともにも、火野の文学を、「日本社会が思想的次元から風俗生活にいたるまで極端な同一化に向つて強制され」ていつた昭和十年代下の、戦争という「酷薄非情な運命を、民衆とともにただ誠実に律義に、彼等の運命に共感して生きた」民衆の心情を代弁する文学としてとらえる視点を提出している。思想的にはなにひとつ結実せずにおわつた「火野とその文学が象徴した空しさは、ひとり火野のみが背負うべきもの」ではなくして、あの大戦争を通過した日本民族全体の問題として、現在、更めて問われねばならぬ問題として、火野の戦争文学を考えているのである。その際、安田が究極的に関心する点は、火野そのものより、むろん、「民衆自体、国民全体が、思想の全体的同質化に向つてなだれをうつつゆく時——むろん、組織的な抵抗は、権力の弾圧によつて、既に壊滅している——その同質化の方向を拒否するための少数、ある場合には個人の姿勢はどのようなであらねばならないか、その掘りどころは何かということ」にあつたわけだ。したがつて安田は、思想の全体的同一化のなかに誠実に、熱狂的に自ら身を投じた戦争下の一般民衆の一つの表情を、火野の文学の成立基盤にみるいっぽう、戦時の狂熱に抵抗的であらうとした、そのおなじ民衆の「もう一つの表情」に目をむけ、その「もう一つの表情」こそ、戦争下の、困難な少数者の文学的抵抗を存在させうる唯一の

基盤であつたはずだと考えているのである。

安田は二年前、戦争下の岸田国土を論じた論文で、岸田の内面にアブリオリに同時存在した「自由主義」と「愛國の情」（「古風な道義」感）の二面を指摘し、岸田の翼賛会文化部長就任を、「岸田のなかの一方が影をひそめ、他方があらわにその裸身を現わしたに過ぎぬ。そして、このような岸田の決断を促したものが（中略）、即ち「新体制」運動と呼ばれるものの、あのひと頃にもつた不可思議な力、全国的な動員と熱狂であつたのだ」（傍点杉野）とのべていた。火野とおなじ側に立つた文学者の像として、やはり岸田をとらえていたといえよう。

安田は、その論の終末尾で、岸田の生きかたと対比するかたちで、もういっぽうの、沈黙、非協力的文学者（荷風、谷崎、秋声、川端、広津、堀など）をとりあげ、「抵抗」などとはいまい。（誰があの時抵抗なぞしたものか、できたものか。）しかし、少くとも△巨大な政治的現実▽を絶対化せず、非協力を貫き通す姿勢は、伝統的な美感に固執して、△自我の実感にたてこもり▽つづけた幾人かの作家（中略）によって保持された」とのべていたが、ここにいう、これら少数の文学者にとつた「△巨大な政治的現実▽を絶対化せず、非協力を貫き通す姿勢」こそは、火野論で安田がみたところの、国民に伏在した、火野のみすてた「もう一つの表情」に連結するものであつたといえよう。

これらの作家の文学が、どのようにしてその「もう一つの表情」に連結していったかの具体的な究明は、まだ明きらかではない。さきへのべたように、それが絶対権力の弾圧のもと、千々に

分断、孤立させられ、伏在はしたが、時代の表面には存在しなかつたために、戦争下、火野や岸田が有した国民との連結を解明しようようには、その解明が困難なのである。しかし、これを堀に即してみても、戦争下の文学評価が、この時代がはなはだ特異な相貌を帯びていたがゆえに戦争的なるものに対するさまざま内面的苦悩や抵抗姿勢のもと、いかにおのれの文学を時代下に高めていかでかおそらく決定するとおもわれる以上その「解明の困難」を克服し、そこに抵抗といひうるような内面のたたかひが、時代との対応のなかに、認知できるか否かは、やはりまことに大切な一点になつてくるのである。

戦争下の堀を考えるばあい、十年代戦争の出発点となつた十二年日中戦勃発時に『文芸』に巻頭言としてのせた次の発言は、堀の十年代下の以後の基本的姿勢を示すものとして、やはりきわめて重要であるとおもふ。

リルケは大戦当時終始沈黙を守つてゐたやうです。やはりさうするのが一番いいのではないかと考へます。カロッサは「ルウマニア日記」など書いてゐますが、あれも大戦が終り、それについてあらゆる騒がしい戦争文学が氾濫したあとで、静かに現はれました。本當の文学といふものはさういふものはさういふ風にしか生れぬものだと言ひたいして居ります。『文芸』昭12・10

堀がカロッサの例をひきつつ、第一次大戦時の戦争文学の氾濫をいうとき、彼の目のはしに、国民の熱狂を背景にやがて「巨大

な政治的現実」を絶対化しおちこんでいくおおくの戦争文学的なものが、日本の文壇をはげしくかきまわすことになってゆく当時の至難な時局が、敏感にとらえられていたことは疑いない。しかもそれらが、けっして「本当の文学」とはなりえなく、「本当の文学」が、それら戦争文学のあらゆる騒がしい氾濫のあとで、静かに「沈黙」をとき、あらわれるものであることを、彼はのべたのである。こころみに、日本の昭和十年代文学の指導的イデオログとして、ともにその対立的主線に自己を高めており、その意味で、この戦争下のもっとも重要な使命になったとみられる中野重治、小林秀雄が、この時期に、時点をおなじくしどのような発言を示しているかをみておきたい。

いよいよ戦争となった暁にはわれわれ文学者はどうなるか？ 事情が非常に切迫して来た瞬間には、私は文学者といへども銃をとらねばならぬと思ふ。(中略) 私はナチスではないからナチスを担ぎはしないが生きた軍事知識のためにピストルも習ひたいし、タンクの活動もよく知りたい。(二つの戦争のこと) 昭11・10 中野重治<sup>3)</sup>

僕には戦争に対する文学者の覚悟といふ様な特別の覚悟を考へる事が出来ない。(中略) 文学は平和に対してはどんな複雑な態度でもとる事が出来るが、戦争の渦中であつては、たった一つの態度しかとる事は出来ない。戦ひは勝たねばならぬ。そして戦ひは勝たねばならぬといふ様な理論が文学理論の何処を捜しても見附からぬ事に気が付いたら、さっさと文学など止めて了へばよいのである。(小林秀雄) 戦争につ

いて「昭12・11」

岸田の、ファシズムの否定を説きつつ、「ピストルも習ひたい」と語る中野、「戦ひは勝たねばならぬ」「さっさと文学など止めて了へ」と語る、火野にもいた小林の姿、そこには、やがて日本の文壇の全体を染めぬいてゆく、戦争の「巨大な政治的現実」を絶対化せんとする「文学の独立」放棄の、ひとつのあきらかな源流があったといえるとおもう。それと同時に、脆弱な文学者ともみられる堀が、その時点であつて、平静な文体のうちに、自己の確信する「本当の文学といふもの」のありかたを、意外にきつぱりい切っている点を重くみるべきであり、戦争を絶対化せず、それから文学を守ろうとする堅牢な精神が、ここに鮮明に示されていることは疑われない。わたくしはここに、十年代下の以後の堀の文学の基本線があると考ええる。

以後敗戦にいたるまで、堀は発言通り、戦局に対し、文学者として完全な沈黙を貫きとおし、以後のいかなる作品にも、戦争に自己の文学を屈伏させた痕跡をとどめなかつた。これはまことに、戦争下を通じ、作家として数すくなく、はなはだ希有な生きかたであつたといひうるであろう。なるほどいっぽうには、中野などによる、いわゆる「腰をさげ一歩後退した」かたちの陰微で執拗な反抗の姿勢もあつたのであり、リベラリスト岸田などのばあいのように、国策に身を投じた位置で、逆手に文化統制の「防波堤」、「バリケード」を築かんとする戦術もあつたのである。しかもだじなことは岸田などのばあいといえども、自己の文学的良心をきずつける犠牲は、つねにきびしく求められ、彼らに終始

随伴していった点であり、結果として、そのころのみが統制をすこしでも押しかえす力に結晶せず、けつきよくは、つねに逆の方向に、じりじり日本の文学を追いこむ方向へ働いたことをおもえば、彼らが協力的姿勢を示すことで、附帯的に戦争下におのずと放つことになった「文学」的発言や社会的行動の非文学性が有効な働きとして、当時の日本で、実質どのような役割と意味を国民に対しはたしていたかの責任の問題は、やはり問われてくるのであるとおもう。

いずれにもせよ、彼らの「抵抗」的発言や行動は、結果としてうしろめたさをにがく背負わされることになっているのであって、戦争下の、岸田と荷風の分岐点がいづこにあったかをおもうとき、彼らにおける、単なる苦しい抵抗的心情をこえて、われわれに深く考えさせるものがあるとおもわれる。当時、やはり沈黙し、戦争に非協力的態度を貫きとおした広津和郎が、岸田に対し、彼の態度を一種甘たるい「理想主義」とみなし、「沈黙報國」にも忍耐と克己が要る」とのべたことばは、この点をするどくついたものであったのだ。

さて、堀の戦争下の文学的展開は、それぞれ密接に重なりあいつつもおおきく三系列(A ロマン系列、B 王朝もの系列、C エッセイ系列)をたどつてなされたとおもう。それらのなかを堀の歩んだ以後の文学的ありようが、はたして沈黙的抵抗とよびうるものをとどめているかを、以後説明しなければならぬ。これらのうち、B、および後期C系列については、この年代下を、あ

の「好戦主義のイロニイとして戦争への審美的参加を推進した」(橋川文三)<sup>(9)</sup>保田与重郎を中心とする日本浪漫派などの、「古典復帰」の時代機運との対応関係がおおきな問題になるとおもふ。しかしこの点については、さきごろの機会に、すでに私見の一部をのべたことがあるので、ここでは、主としてA系列に探索の主眼をおきたいとおもう。

いったい、B、C系列が、沈黙しつつ外界から受けた微妙な影響のかげを、内面にかなり色こくおとしていったと推定されるに比し、「われわれはロマンを書かねばならない」(日記 昭4・8・30)と若く決意して以来、終生志向した西洋的な、虚構の本格小説として追い求められ、その意味で、日中戦時表明した「本当の文学といふもの」の「確信」の線上に直接つながっていったA系列は、すくなくとも、その作品の内面的世界を検討するかぎり、戦争的な時代との直接の関連をとらえることはできない。それはただ、これらの作品が、その内質においてとれだけの芸術的達成をとげ、それによって、つまるところは日本近代文学のおおきな展開のなかで、このはなはだ特異な相貌を帯びる昭和十年代下にどういう文学的役割をはたしたか、はかるほかはないといえよう。(この点に関しては、すでに早く片岡良一の、文学史的視点からとらえたきびしくするどい論文があり、その論を継承した菊地弘の論考、さらに「菜穂子」に焦点をすえた佐藤泰正の新提言も特に重要であることをいっておきたいとおもう。)

しかしここでは、安田武が戦争文学論でおおきく取りあげていたとおなじ、読者層との連関の視点に立つて、作品発表時の四圍

が示した外的反響に目を注ぎ、堀における、この問題の、現状下の側面的整理をしておきたいとおもうのである。

「菜穂子 cycle」の第一部「菜穂子」が発表されたのは、太平洋戦争のはじまった年、昭和十六年の三月である。かえりみて、当時日本の文学者たちがどこまで苦し追いかまれていたかは、ここに、いちいちのべることもないだろう。

中野好夫は、この崩壊過程にあった太平洋戦争前夜の位置で、ただちにこの作品をとりあげ、次のような印象を吐露したのである。

私の感性には、文明のあらゆる渣滓が、皮膚の上に溜って来る垢のやうにこびりついてゐることを誰よりもはつきり知ってゐるつもりだ。にもかゝらず、私は堀氏の世界にいつもながら強い魅惑を感じないではゐられないのである。故郷を失った人間の郷愁とでもいふものであらうか。(中略)今日に於て文学に關つてゐるほどの者ならば、(中略)すべてが文学の筆を折らなければならぬ時の来るべきを覚悟してゐる筈だ。(中略)

だがさうした場合にも、私は敢て堀氏だけには、怙依地に氏の世界を守りつゞけてもらひたいと願つてゐる。(中略)堀氏の場合に限つて、私は現代の雑音が彼に不必要な動揺を与へないことを心から祈るもので(中略)ある(二つの中の文)学」『中央公論』昭16・4)

ここには、堀そのものより、中野自身の戦争下の心の姿が、こんな、くつきり照らされているのであらう。中野重治が「ピンス

トルも習ひたい」といい、小林秀雄が「文学など止めて了へ」といわなければならなかつた状況が、すでに早くあつたことはまじめにものべたが、このころ、すでに日本の「民衆自体、国民全体が思想の全体的同質化に向つてなだれをうって」(安田)いたのはあきらかであらう。その時点下であつて、「その同質化の方向を拒否するための少数、ある場合には個人の姿勢はどのようであらねばならないか、その拠りどころは何か」(同上)ということとは、中野好夫のみならず、すくなくとも、内部に非戦、反戦的心情をひそめた当時の知識人たちの、最大の問題であつたとおもわれる。

いま僕が考へてゐることなども、(中略)それを果たさないでは死にたくないやうな気がし、やはり病身であつても、出来るだけ病氣にまいらぬで、長生きしてゐたいものだと思はずにはゐられない。しかし仕事はどんな小さいものでも、しておいた方がいい。どんな小さいものにも自分の何かは残る(萬巻義敏宛書簡 昭16・1・17)

これは、「菜穂子」完成直前、仕上げに没頭しつつ、堀が書き送つた書簡の一節であるが、こういつたなげないことばのなかにも、中野をして「すべてが文学の筆を折らねばならない時の来るべきを覚悟し」つつ、「堀氏の場合に限つて、……現代の雑音が彼に不必要な動揺を与へないことを心から祈」らしめるにたる、堀の戦争下に一貫した文学の態度があつたといえるのではないか。リベラリスト中野好夫が、わずかに堀の文学のうちに、自己の内部にあやうく押しつぶされんとするなにもを託し、賭けよ

うとしていたかは、もはや、あきらかであるう。

荒正人は、この太平洋戦争直前までの文学の読者層の変遷をのべた論文で、<sup>(13)</sup>この、堀の「菜穂子」に対する中野好夫の感慨をまづ第一に想起している。そしてそのあと、この、十六年の戦争勃発時の文学状況を回想し

昭和十六年は、太平洋戦争の前夜だが、いまから思い返してみると支那事変が膠着し、日本人全体が泥沼のなかであがいているといった状態であった。だから、十二月八日になると、からりと胸のなかが晴れたという実感を抱いた知識人も多かった。そして、この戦争は勝ちいくさだと期待したのである。(中略)半分以上の文学者が、戦争を強く支持した。少数の文学者が、戦争を否定した。(中略)しかし、戦争の無意味を知って、これに動じなかった文学者が、ごく少数ではあったが、存在したことを忘れてはならぬ。

と語っている。そして、検閲のゆるむ隙をうかがい、戦争に対する間接の批判を繰りかえし示した中野重治、宮本百合子、窪川鶴次郎、岩上順一などを支持する読者層が、わずかに存在していたことをあきらかにするいっぽうその、戦争に抵抗する読者層が、同時に

堀辰雄・石川淳・中島敦・石上玄一郎、その他、少数の作家を、秘かに、熱心に読みふけた。保田与重郎・林房雄・小林秀雄を憎んだ

読者層に重なっていたことをい、

戦争文学流行の一隅に、こういった抵抗のあったことは、

忘れることができない。この抵抗する読者層(中略)は社会的に全く孤立していた。昭和十七年になって、太平洋戦争が始まり、戦争の規模が拡大するに従って、この孤立は、一層深まっていた。

とべている。

いっぽう、中村光夫は、戦争中に戦死した海軍予備学生たちの手紙を整理したとき、彼らがほとんど全部堀辰雄の愛読者なのに驚いたことがあったが、実際戦争の少し前から戦時中にかけて、堀は青年たちには絶対の偶像だった。堀の作品は濁ってゆく時勢のなかで彼らが切ない純潔を託す象徴だった(丹羽文雄と堀辰雄『毎日新聞』昭28・9・5)

と語っているが、この読者層の存在は、荒の回想する当時の読者層の一般的状況とともに、火野の文学に象徴される戦争文学流行に、圧倒的なだれをうった一般読者層とはあきらかに異質の、「もう一つの表情」を手放せなかった少ない読者層との連繫を示している点で、この年間の堀を考えるばあい、やはり、見捨てられてはならぬ点であるとおもう。この点については、矢内原伊作の、中村光夫の前記発言をうけた「死の世界のなかに猶生を輝かしく支える強さが堀辰雄の文学にあった(中略)「われわれの生はわれわれの運命より以上のものであること」堀辰雄の文学が終始証しているこの思想ほど、軍隊生活のなかでよくを慰め力づけたものはない。」とのべた回想、<sup>(14)</sup>さらに、『解釈と鑑賞―堀辰雄』(昭16・3)の座談会で丸岡明の語る発言なども、その傍証とな

るものを示している。<sup>(15)</sup>

さらに方向をかえ、もう一点指摘しておきたいとおもう。それは、「菜穂子」発表時における『中央公論』の編集者、畑中繁雄の最近の回想である。<sup>(16)</sup>

なかでも、堀辰雄の「菜穂子」のごとき、太平洋戦争突入の年に、中央公論文学賞をえていることなど、当時の環境を知るものからいえばかなり印象的である。(中略)さしもの当局も、小説にはなかなか手を下しにくかった事情をむしる奇貨として、ぎりぎりの段階までそれら小説の間接擁護に心をくだいた編集者たちの蔭の善意(むしろ執念といえようか)によってこれがささえられていた

「菜穂子」にあたえられた中央公論文学賞なるものが、「時局下、文学精神の昂揚の機運に貢献するため昭和十七年制定された(賞)」(傍点杉野)であったことをおもえば、「菜穂子」こそは受賞されるべきものではなかったはずで、ここで、畑中がなにをいわんとしているのかは、もはやあきらかであろう。

これを要するに、以上の結論としていえることは、堀が戦争への「沈黙」の表明以後あゆんだ文学のみちゆきが、特殊な相貌を呈していた十年代戦争下にあつては、そのこと自体、有効な働きとしておのずと戦争への文学的抵抗の姿勢となりえてゆき、すくなくとも、この年間の、沈潜した数とほしい戦争批判層たらんとする「もう一つの表情」を捨てえぬ抵抗的精神の、のこされたわずかな支えとして受とめられ、戦争下に独自の位置を占めえていたということである。

本多秋五は、かつて「戦争責任追及の満足な方法というのは、なにか特定の方法がただ一つだけあるのではないのかも知れない。」と語った。<sup>(17)</sup>冒頭のべたごとく、日本の現実に真の抵抗というるものがなかった以上、ほとんどすべての文学者が、何らかのうしろめたさをこの十年代下にのこしたのである。協力的偽装派の「日本の現実を水くぐった」文学的抵抗は、けっかとして附带的に、いちめんおのが身を「協力」の汚濁に苦しく染めざるをえなかったし、沈黙することおのが身を「協力」の汚濁に染めることを拒否した文学的抵抗者は、いちめん戦争下の「日本の現実を水くぐらぬ理性であったといわれても仕方がない」ということになるわけである。したが、長所と弱点を相互に背合わせに持ち合ったこの二様の抵抗のありかたの評価は、決め手となる「特定の方法がただ一つだけあるのではない」わけであり、抵抗とその病根をあきらめるためには、相互に他者の「健康な部分」をもあえて「切り落す」外科手術的な方法も不可避だということになるのである。

この意味で、中野重治や岸田国士の抵抗批判が成り立つ反面、堀辰雄の文学を「日本の現実を水くぐらぬ」「星董派」の文学として、戦争下の姿勢に「抵抗」の意味あいを重く認めぬ観点も成り立ってくる。本多が、戦争下堀の周囲に屯し、戦後の文学的出発の基盤を養った加藤周一・福永武彦・中村真一郎の姿勢をすくどく批判したのも、この点にかかわっていたのである。<sup>(18)</sup>

しかし、ひるがえっておもうと、戦争下の日本の「現実」とは何か、その現実を「水くぐる」とは、文学者にとってどうするか



とであつたかといふことは、「現実」という語の概念、そのものが、ここではかなりにあいまいである。文学者にとり、彼のかか  
 わる現実が皮相の現象的現実にとどまるものであつてならぬこと  
 が自明すれば、「日本の現実を水くぐらぬ理性」と批判される堀  
 辰雄の文学が、戦争下に、現実には、かなり重層な「非戦・反戦  
 的」読者層の支持をえ、そのことで、有効な働きとして、日本の  
 戦争下に直接相渉る文学たりえていた意味はどう説明されるの  
 か、それを「水くぐらぬ」とする見かたは、「健康な部分」を  
 「切り落す」方法をもつてすれば、やはり充分とはいえないこと  
 になるのである。

花田・佐々木・杉浦共編になる『日本抵抗文学選』(三一書房)  
 が出たのは八年前、昭和三十年であつた。そのなかに、中野重治  
 久保栄、宮本百合子などにならべて、堀のエッセイ「橋の上に  
 て」(昭18・5)が非戦・反戦的抵抗の文学として選録されてい  
 たことをいま思いだすのである。そして、この一見「日本の現実  
 を水くぐった」とは認められぬなにげないエッセイを、当時、す  
 でに抵抗文学として花田らがとりあげた姿勢に、こんにちあらた  
 にわたくしは共感を覚えるのである。堀の戦争下の足跡を文学史  
 的にとらえるばあい、いまや、この一見「日本の現実を水くぐつ  
 た」とは認められぬ戦争下のエッセイ群をも、「水くぐった」作  
 品として把握する高次な視点がはつきり求められる状況になつて  
 いるとわたくしは考えるのである。(六三・十・八)

註1 平凡社『転向』思想の科学研究会編(上巻昭34・1中巻

昭35・2下巻昭37・4)なお、下巻は戦後の転向を扱つて  
 いる。

2 「戦争文学の周辺——火野葦平——」『文学』昭37・12、  
 同38・6・同38・7参照

3 「翼賛会文化部と岸田国土」『文学』戦争下の文学・芸術  
 (昭36・8参照)

4 註3の論文で、丸山真男の論文「日本の思想」(講座『現  
 代思想』XI岩波書店)の考えを借りている部分。△

5 講談社『小林秀雄』江藤淳昭36・11二七八頁より引用  
 はその引用を示す。

6 註3論文参照

荷風の『濃東綺譚』のお雪と岸田の「牛山ホテル」のさ  
 とを対比しつつ、その扱いの微妙な相違を指摘するいっぽ  
 う、その初期において、岸田が、荷風とやがて対蹠的な地  
 点に立つことになるその相違は、当初、実に紙一重であつ  
 たことをするどくついている。

7 註3論文より引用『大和路』昭21・11

8 「日本ロマン派と戦争」『文学』昭36・8参照

9 白楊社『近代派文学の輪廓』昭25・10特に「新心理主義  
 その他」が重要

10 「芥川から堀辰雄へ」『国文学研究』第二十一集昭34・秋  
 季号参照

11 「堀辰雄——その一側面」『国文学研究』第二十七集昭37  
 ・後季号参照

12 新潮社普及版『堀辰雄全集』月報第4号「第四卷解説」  
 昭33・9 福永武彦参照「榆の家」、「菜穂子」、「ふるさと」とをひとつの cycle としてとらえるみかたを示している。

13 「文学の読者層の変遷——満州事変から太平洋戦争直前まで——」『文学』昭33・4 参照

14 「堀辰雄追悼」『実存主義の文学』昭30・2 河出書房刊所収参照

15 丸岡発言——戦争中に非常に読まれた。ぼくの弟は北支で戦死したが北支でたまたま読んだのが、奈良に行った時の日記「大和路信濃路」で、それに非常に感動して、ぼくに手紙をよこした。会社員で戦争に行つて死んだ男ですがどうしてそんなに強く打たれたのか、不思議に思つていませ、文学の形式とかいうものでなく、断片的にもやはり何か強いものがある。／少なくともウソは書いていないな。

16 「生きてゐる兵隊」と「細雪」をめぐつて『文学』戦争下の文学・芸術(昭36・12 参照)

17 日本文学報国会編二千六百三年版『文芸年鑑』昭18・8 第一部II c 「文学賞」の項参照

18 「『完全な良心』の仮定」『物語戦後文学史』昭35・12 新潮社刊所収参照

19 「中村・加藤・福永の仕事」同前註書所収参照

附記

この小論は、昭和三十八年度全国大学国語国文学会秋季大会(九月十五日於日大)において行なつた研究発表(昭和十年代の堀辰雄——「日本的なるもの」への接近姿勢をめぐつて——)の前篇をなすものであります。

執筆 者 紹 介

山路平四郎	昭4	大文	文学部教授
戸谷高明	昭29	修士	教育学部講師
上野理	昭36	修士	文学部副手
藤平春男	昭19	大文	文学部講師
武川忠一	昭21	大文	商学部講師
山下一海	昭34	修士	早稲田高校教諭
原子朗	昭25	大文	立正女子短大助教授
井上宗雄	昭28	修士	立教大学講師
谷脇理史	昭36	一文	大学院在学
中村博保	昭36	修士	芝学園高校教諭
川合道雄	昭15	大文	港工業高校教諭
山崎一顕	昭37	大文	大学院在学
杉野要吉	昭33	教育	小樽緑陵高校教諭